STEINWAY & SONS®

10th Anniversary
Steinway & Sons Japan

スタインウェイ“デザイン”のピアノ。

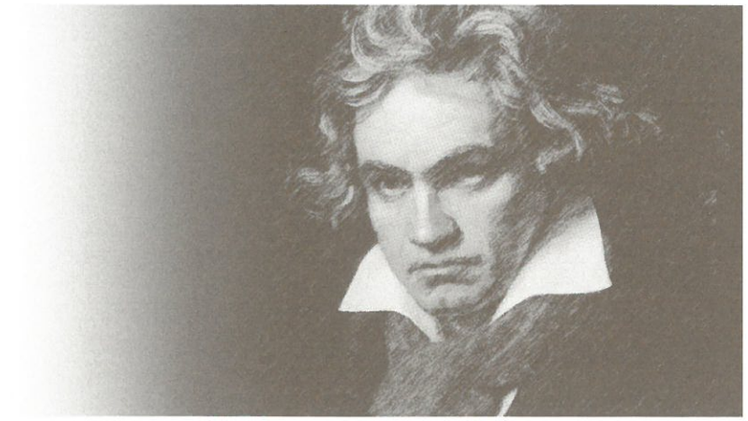
“可能なかぎり最高のピアノを”という創業者の情熱を受け継いで革新を重ねたスタインウェイのピアノづくりは、ゆるぎないスタインウェイシステムとして確立されました。スタインウェイピアノは150有余年の歴史を通じて昔も今も世界の偉大なピアニストたちに選ばれ続けています。
そしてスタインウェイは、なお革新の心を弛めることなく、その設計思想に現代テクノロジーを駆使した研究開発の融合を試みて、全く新しいピアノ、ボストンピアノならびにエセックスピアノを創出しました。
今、スタインウェイ、ボストンそしてエセックスピアノは、スタインウェイ“デザイン（設計）”のピアノとして、それぞれに固有の特長をもって、ピアノ音楽とともにある全ての方々のご要望に幅広くお応えしようとしています。

the Family of Steinway Designed Pianos

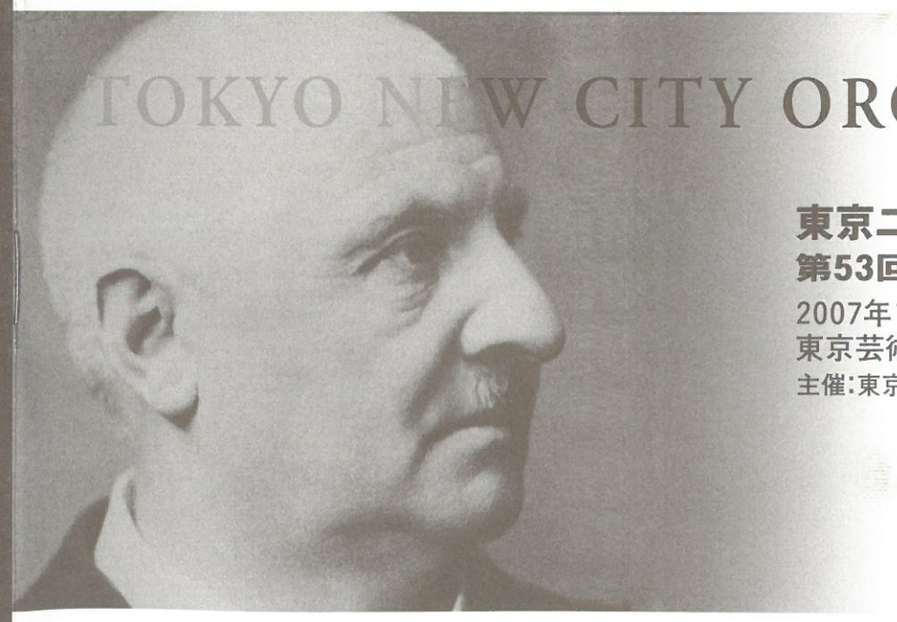
スタインウェイジャパン株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋1-1-15 物産ビル別館8F Tel:03-5251-6550／Fax:03-5251-9585 http://www.steinway.co.jp

芸術文化振興基金助成事業

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA



Beethoven
Bruckner



TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団
第53回定期演奏会
2007年11月21日(水)19時開演
東京芸術劇場大ホール
主催:東京ニューシティ管弦楽団

この事業は(社)私的録音補償金管理協会(sarah)からの助成を受けて実施しています。

Message

校訂者・ウィリアム・キャラガン氏からのメッセージ

《第三交響曲》のこのバージョンは1874年の暮れにブルックナーが友人の
モーリツ・フォン・マイフェルトに《ワーグナー交響曲》を大きく改良したと手紙で伝えた時のものである。
この改良はオーストリア国立図書館にMus.Hs.6033という
筆写譜（これはバイロイトに現存する筆写献呈譜と双子の関係である）として所蔵されている。
変更は写譜職人により挿入され、作曲家自身がその上から手を加えている。

特に第1楽章に対してリズム面で味わい深く、緻密な改良が行われている。
小節数の縮小や変更は無いが、いくつかの重要なパッセージにおいて金管楽器に精密な
カノン手法が採られ、他のバージョンに見られない沸き立つような光彩を放っている。

今回の演奏はこのバージョンの世界初演であり、内藤彰と東京ニューシティ管弦楽団のために
ウィリアム・キャラガンが委託作成したものである。

This version of the Third Symphony presents it as it was at the
end of 1874, just before Bruckner wrote to his friend Moritz von Mayfeld
that he had greatly improved his "Wagner" Symphony.
The improvements wer entered into Austrian National Library Mus.Hs. 6033,
the twin of the dedicatory manuscript which is now at Bayreuth,
by virtue of glued-in revisions prepared by a copyist and later
over-writing by the composer.
The result adds greatly to the rhythmic interest and complexity of the piece,
particularly in the first movement. There are no simplifications or changes
in length; instead, in certain crucial passages the brass parts are broken
up into a highly detailed canonic texture that makes the music shimmer and
vibrate with a luminous intensity present in no other version.
This performance is the world premiere of this version,
the editing of which was commissioned from William Carragan
by Akira Naito and the Tokyo New City Orchestra.

ウィリアム・キャラガン　William Carragan

ブルックナーの校訂者。ブルックナーの全交響曲の校訂者であったノーヴァク氏の要請により、第2番の新稿をブルックナー協会から出版した他、第1番、第5番にも携わり、1983年には第9番をいったん完成させた。ブルックナーの作品の演奏についての時経的な研究書の他、大学の物理学のテキストの著者、ギリシャ正教の音楽の編集者、さらにハープシコードの音楽の演奏家および編集者としても活動。

Program

第53回定期演奏会

芸術文化振興基金助成事業

The 53rd Subscription Concert

指 揮：**内藤 彰** Conductor: Akira Naito

ピアノ：**宮谷 理香** Piano: Rika Miyatani

コンサートマスター：**浜野 考史** Cocertmaster: Takashi Hamano

＊本日の演奏について―解説 内藤 彰

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven (1770-1827)

ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調「皇帝」〔38′〕

Piano Concerto No.5 in E-flat major "Emperor"

ヘンレ新版1996年

Henle New Edition 1996

第1楽章　アレグロ	I. Allegro
第2楽章　アダージョ・ウン・ポーコ・モート	II. Adagio un poco moto
第3楽章　ロンド　アレグロ・マ・ノン・トロッポ	III. Rondo. Allegro,ma non troppo

intermission

アントン・ブルックナー
Anton Bruckner (1824-1896)

交響曲第3番 ニ短調「ワーグナー交響曲」〔62′〕

Symphony No.3 in d minor "Wagner Symphony"

第1.5稿キャラガン校訂世界初演

1874 edition revised by William Carragan (World premiere performance)

第1楽章　穏やかに、神秘的に	I. Gemäßigt, misterioso
第2楽章　アダージョ　厳粛に	II. Adagio. Feierlich
第3楽章　スケルツォ　かなり急速に	III. Scherzo. Ziemlich schnell
第4楽章　フィナーレ　アレグロ	IV. Finale. Allegro

2曲ともピリオド奏法（作曲された当時の奏法）で当時と同じくヴィブラートを用いずに演奏いたします。
また、弦楽器は独特の弓使いで演奏いたします。

ブルックナー《第三交響曲》の未知の稿態

川崎 高伸
Takanobu Kawasaki

今宵、ブルックナーの《第三交響曲》の希に見る複雑な改訂の工程のなかで、唯一残された謎の間隙が埋められる。ウイリアム・キャラガン校訂による1874年ヴァージョンの世界初演である。

ブルックナーは、1873年12月31日に第1稿を完成させた。早速彼は、出来上がったスコアの筆写譜を2部作らせた（1部が458ページにもおよぶ巨大なものを2セットも）。これには目的があった。そのうちの1部は、美麗な献呈辞が付され、約束どおりヴァーグナーに贈られたので、バイロイトに現存する。ここには一切の加筆がないため純粋の第1稿として、全集版の第1稿の基礎資料に使われた。最近では、シモーネ・ヤングがこれを演奏している。

もう一方の筆写譜は、この作品の初演を意図して、1874年夏にヴィーンフィルに提出された。実際、オットー・デッソフによって、その秋には試演がなされたのだが、プログラムに空きがないという理由で上演には至らなかった。これが、現在ヴィーンのオーストリア国立図書館に保存されているMus.Hs.6033である。この中にブルックナーは、かなりの改善を行なった。伝記や解説でしばしば述べられる『1874年にかなり改良』とはこれのことである。この資料になされた修正の多くは第1楽章に集中しており、筆写譜への数多くの直接加筆や部分的な貼り付けと並んで、10ページにも及ぶ五線紙の追加・差し替えが行われている。具体的に言えば、全集版第1稿の、369↙～378小節の10小節（2ページ）および401～428小節の28小節（6ページ）にあたる部分であり、この8ページは古い筆写譜を取り除いて差し替えられている。音楽としては、展開部の、よく話題になる主要テーマの原調再提示による高揚部分の前後である。

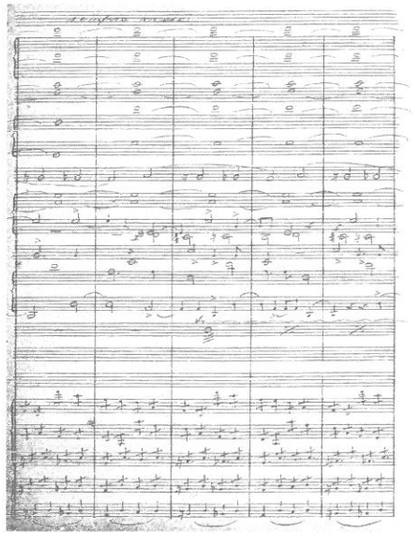
ところが不思議なことに、最後の2ページはコーダの680～689小節の10小節にあたる部分だが、ここでは古い筆写譜も残されているのである。したがって、このMus.Hs.6033では、結果的に全体で10小節長くなってしまっている。そのうえ、この2ページを使用すると改訂が中途で途切れているため次に続かない。ありていに言えば、この2ページは筆写譜の中で浮いてしまっているのである。だが、幸いなことにキャラガンは同図書館に保存されているMus.Hs.39.181という4ページ（20小節）の筆写資料がこの2ページの断片に繋がるものであることを発見し、この部分も演奏を可能とした。したがって結果的にコーダの差し替えは、6ページ、680～709小節の30小節↗に及ぶものとなった。何故コーダが、このような中途半端な保存状態であるのかは明らかにされてはいないが、この部分が試演には間にあわなかったことは推測され得る。

差し替えの行なわれた部分では、第1稿とは一味違う音楽を聴くことが出来る。これが書かれたのは、ちょうど《第四交響曲》作曲中のことなので、この曲のフィナーレのコーダに見られる拍をずらしたカノンのような手法が随所に採られていることが注目に値する。また、バイロイト稿にはないトランペット主題の4分の1への縮小化（これまでは2分の1しか使われていない）も試みられている。これらは、リズム構造の立体化、躍動化に大いに役立つことになった。

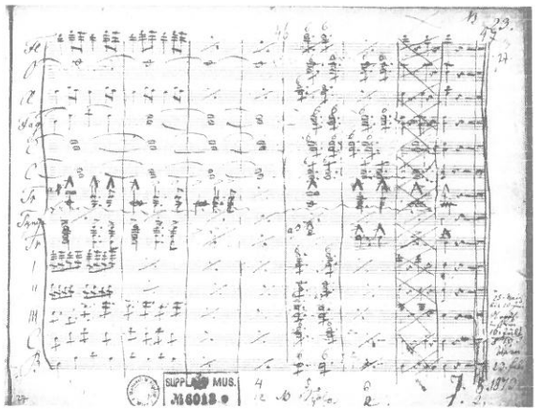
第2楽章以下には差し替えはない。部分的な加筆が存在するだけである。そういった中で、特にスケルツォのトリオの加筆が注目に値する。第1稿と第2稿の違いの多くは既にこの筆写譜になされているのである。交響曲全体の小節数は、第1稿と全く同じ2056小節である。すなわち拡大もカットもなされていない。

なお、本日の演奏では、第1楽章の終結の4小節は、オーストリア国立図書館所蔵の自筆譜Mus.Hs.6013が使われる。これは、改訂の際不要となって取り除かれた五線紙（いわばゴミ）を几帳面に取りまとめたものである。これによれば、第2稿に含まれるSchnell（急速に）と指示された楽章最後の24小節は、第1稿のとき既に存在したものであることが明瞭に刻印されていることが分かる。すなわち、Mus.Hs.6013の中に移行句としてSchnellの文字が記載され、その後の不要となったページには大きくバツが書かれているのである。本日演奏される形態は、第1稿の中でさえ不要となった部分での修正であるので、それはごく初期になされたもの（おそらく1874年秋）と推定され得るのである。ここでは、細かい3連符をバックに、雄大なテンポのなかでトランペットとトロンボーンが主題の3小節を力強く吹奏して終わる。

本日演奏される稿態は、真に、ブルックナーが最初に演奏して欲しかった形を伝えるものであり、今後の第1稿の演奏に大きな問題を投げかけることになるであろう。



差し替えられたページ、第1楽章685～689小節
〈オーストリア国立図書館所蔵Mus.Hs.6033〉



放棄された自筆譜第1楽章最終ページ
〈オーストリア国立図書館所蔵Mus.Hs.6013〉

「アントン・ブルックナーの顔が描かれているオーストリアの1,000シリング紙幣」

2002年にEU（ヨーロッパ連合）が発足して（07年現在27か国加盟）、紙幣も統一されてユーロになりましたが、それまでは、加盟各国の紙幣の中に、音楽家の顔が描かれた紙幣がたくさんありました。

それらのお札のご紹介を昨年から始めまして、これまでクララ・シューマン（ドイツ、100マルク）、ヨハン・シュトラウス（オーストリア、100シリング）、エドワルド・グリーグ（ノルウェー、500クローネ）、フレデリック・ショパン（ポーランド、5000ズロチ）をご紹介しました。今回はアントン・ブルックナーです。（現在通用していません。）（資料提供：神田 正美）

Profile

指揮:内藤　彰 Akira Naito (Conductor)

名古屋大学理学部卒業。在学中より指揮を山田一雄氏に師事する。桐朋学園大学研究科(指揮専攻)にて、小澤征爾氏、秋山和慶氏、尾高忠明氏他に師事し、修了後(社)山形交響楽団の専属指揮者を3年間務める。これまでに新日本フィル、東フィル、東響、新星日響、シティ・フィル、神奈川フィル、名フィル、九響他、日本の多くの主要オーケストラを指揮。1990年東京ニューシティ管弦楽団を設立。

海外では、1991年ベオグラードフィルを指揮、1992年には、モスクワ音楽院大ホールにて、モスクワ交響楽団を指揮し、ロシア音楽の魂を日本人から教えられたと絶賛された。その後1996年5月、ロシアの国立ヴァローニッシュ歌劇場にて『セヴィリアの理髪師』を、1997年5月には、ベラルーシ国立歌劇場にて『蝶々夫人』を指揮。また2001年3月サンクトペテルブルグ・カペラ交響楽団、2002年5月ロシア国立ウリヤノフスク・アカデミー交響楽団に客演し、新聞各紙に大きく取り上げられた。2001年12月北ハンガリー交響楽団、2002年7月ミラノスカラ座フィルのメンバーを中心とする州立ロンバルディア室内管弦楽団の北イタリアツアーを、2003年3月にはメキシコ州立交響楽団を指揮。2007年11月上海音楽祭に出演。

2004年1月に行なわれた歌劇『蝶々夫人』の公演にて、作曲者プッチーニの強い願いにもかかわらず初演以来一度も使われてこなかった、日本の伝統的'かね類'(寺の釣鐘の音、お椀型のキン、風鈴他)に、12音の音程を持たせ'楽器'として特注創作、それにより作曲者の願う本当の『蝶々夫人』の世界初演に成功し、音楽界の話題となった。更に2004年7月には、イタリアのプッチーニ・フェスティバルにおいて、この鐘が使用され、地元の新聞・テレビに大きく取り上げられた。

'04年9月には、ブルックナーの交響曲第8番のAdagio楽章の新稿を、楽譜を起こすところから関わり、世界初演を果たした。この"ブルックナー新稿の世界初演シリーズ"の話題は、多くの新聞、音楽雑誌を賑わすのみならず、ライブ録音のCDも、「レコード芸術」誌他で、非常に高く評価されている。また、日本初のブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスも大いに注目を集めた。現在、東京ニューシティ管弦楽団、及びプロ混声合唱団「東京合唱協会」音楽監督・常任指揮者。

日本指揮者協会幹事。

ピアノ:宮谷 理香 Rika Miyatani (Piano)

桐朋「子供のための音楽教室」、桐朋女子高等学校を経て、94年桐朋学園大学卒業。桐朋では松岡貞子氏に、またアンジェイ・ヤシンスキイ、ピオトル・パレチニ、ハリーナ＝チェルニー・ステファンスカ、園田高弘の各氏にも師事。

95年第13回ショパン国際ピアノコンクールに第5位入賞し、一躍注目を集める。

96年同大学研究科修了と同時に、東京サントリー大ホール、大阪いずみホールにてデビューリサイタル。本格的な演奏活動を始め、国内の主要オーケストラとも共演。

第23回日本ショパン協会賞、第9回飛騨古川音楽大賞新人賞 受賞。

これまでに、パリ/サル・プレイエル(サル・ショパン)、ウィーン/グラフェネック城、ポーランド/ワルシャワ フィルハーモニーホール、ドゥシニキ国際ショパンフェスティヴァル 、チェコ/ノヴェ メスト、99年ショパン没後150年演奏会(ワルシャワ、ルブリン、チェンストホーヴァ、カトヴィツェ)02年国際交流基金の派遣による演奏会(ポーランド/ワルシャワ、クラコフ、スペイン/ヴェンドレル、バルセロナ、アランフェス、マドリッド)等、ヨーロッパ各地にてリサイタル。中国/蘇州にて日中友好コンサート。

01年、04年ライプツィヒ弦楽四重奏団と共演。04年 東京オペラシティの「B→C」シリーズでは、バッハから日本人現代作品までの幅広い可能性を示して優れた成果を挙げた。また、セイシャス、アレンスキー、ビーチ、シマノフスカの演奏、助川敏弥作品の新作初演、ピアニスト高橋多佳子との実力派ピアノデュオ<Duo Grace>を始動させるなど、次々と世界を拡げて新たな領域にも意欲的に取り組んでいる。05年には日本ショパン協会主催ショパンコンクールの審査員を務めた。

現在、2010年のショパン生誕200年に向けた企画「宮谷理香と廻るショパンの旅」に取り組んでいるほか、紀尾井ホールでは2年毎にリサイタルを開催。各地でリサイタル、レクチャーコンサート、室内楽など幅広く着実な音楽活動を展開し、その自然で知性あふれる音楽性は高い評価を得ており、今後一層の活躍が期待されている、最も注目すべきピアニストのひとりである。

宮谷理香ホームページ　URL : http://www.miyatani.jp/rika/

東京ニューシティ管弦楽団　いつも なにかが あたらしい

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団は、1990年、音楽監督・常任指揮者に内藤彰を擁し設立された。定期演奏会の他、名曲コンサート、オペラ・バレエとの共演、音楽鑑賞教室、レコーディングなど幅広く活躍。年間5回行われている定期演奏会では、古典奏法も加味したブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスの他、新しく発見されたブルックナーの楽譜使用など、斬新な内容は高く評価されている。

オペラの分野では特に評価が高く、二期会、藤原歌劇団のオペラ公演の他、レナータ・スコット、アルフレード・クラウス、ヘルマン・プライ、ルチアーノ・パヴァロッティ、カルロ・ベルゴンツィ、アグネス・バルツァほか世界で活躍するオペラ歌手との共演も数多く、聴衆や批評家のみならず、世界の著名オーケストラと共演している彼らからも、心からの絶賛の言葉を贈られている。バレエの分野では、国内の主要バレエ団の他、英国バーミンガム・ロイヤルバレエ団、ミラノスカラ座バレエ団、シュツットガルトバレエ団、モンテ・カルロバレエ団、ロシア国立レニングラードバレエ団等海外からのバレエ団の日本公演にもこれまで数多く出演し、公演をサポートする誠実で質の高い演奏が毎回非常に高い信頼と評価を得ている。また、桂三枝、江戸家小猫、三枝成彰、中島啓江ほかを迎えてのファミリーコンサートや、Jリーグ・アウォーズ、さだまさしツアーなどポピュラーの分野でも、大変評判がよく、多くの皆様から親しまれている。

本年11月7、8日に中国上海公演(上海音楽祭)を行い、大成功を収めたことが最近のトピックスとしてあげられる。

●音楽監督・常任指揮者
内藤　彰

●首席指揮者
曽我　大介

●コンサートマスター
鈴木　順子

●客員コンサートマスター
浜野　考史

■事務局

●事務局長
作田　忠司

●事務局次長
渡辺　晶子

●営業顧問
杉山　繁三

●スタッフ
相吉澤　絵里
木村　有美子
鈴木　光子
高松　順子
高松　正典
武曽　眞紀子
古屋　修
堀口　佐知子
松本　敬子
山本　ふさこ

ヴァイオリン
荒巻　泉
伊東　佑樹
上田　博司
大竹　奏
岡田　邦子
小澤　郁子
栗原　りか
剣持　由紀子
小島　光敬
笹井　飛鳥
高階　久美子
徳井　えま
○富山　ゆりえ
中川　さと子
中澤　真理子
中村　朱見
山江　洋子
山川　奈緒子(＊)

ヴィオラ
○桜井　多美子
浅川　文
宇佐美　久恵
尾台　和佳
久郷　寿実子
竹鼻　江美子
堀江　冬子
松田　美奈子

チェロ
○齋藤　章一(＊)
大島　純
葛西　英一
冨成　倫子
船田　裕子
星野　敦
望月　直哉

コントラバス
○徳高　宏行(＊)
青山　幸成
照井　岳也

フルート
○井ノ上　洋(＊)
丸田　悠太

オーボエ
○徳田　振作(＊)
池田　祐子

クラリネット
○西尾　郁子(＊)
松元　香

ファゴット
○藤田　旬(＊)
松里　俊明

ホルン
飯島　さゆり
小川　正毅(＊)
上久保　奈津子
松浦　光男
源　真理

トランペット
○中西　清一(＊)
小野　美海
後藤　慎介
平林　徹
依田　泰幸

トロンボーン
伊藤　吉隆
恵藤　康充

チューバ
松下　晃一

打楽器
○藤城　佳之(＊)
大河原　渉
辻本　洋一

ハープ
平島　さより
平山　菜津子

ステージマネージャー
青木　勝弘

ライブラリアン
牛尾　京子
長田　康宏

○印は首席奏者
＊印はパートインスペクター